正倉院

▲正倉院正倉

由来

奈良・平安時代の中央・地方の官庁や大寺には、重要物品を納める正倉が設けられていました。そしてこの正倉が幾棟も集まっている一廓が正倉院と呼ばれたのです。しかし、あちこちに置かれた正倉は、歳月の経過とともにいつしか亡んでしまい、わずかに東大寺正倉院内の正倉一棟だけが往時のまま今日まで残ったのです。これがすなわち、正倉院宝庫です。

8世紀の中頃、奈良時代の天平勝宝8歳（756）6月21日、聖武天皇の七七忌の忌日にあたり、光明皇后は天皇の御冥福を祈念して、御遺愛品など六百数十点と薬物六十種を東大寺の本尊盧舎那仏（大仏）に奉献されました。皇后の奉献は前後五回におよび、その品々は同寺の正倉（現在の正倉院宝庫）に収蔵して、永く保存されることとなりました。これが正倉院宝物の起りです。そして、大仏開眼会をはじめ東大寺の重要な法会に用いられた仏具などの品々や、これより200年ばかり後の平安時代中頃の天暦4年（950）に、東大寺羂索院の倉庫から正倉に移された什器類などが加わり、光明皇后奉献の品々と併せて、厳重に保管されることとなったのです。正倉院宝物は、このようにいくつかの系統より成り立っています。

この正倉院宝庫は、千有余年の間、朝廷の監督の下に東大寺によって管理されてきましたが、明治8年（1875）、宝物の重要性にかんがみて明治政府の管理となりました。農商務省・内務省・宮内省による分掌体制を経て明治17年（1884）に、宮内省の専管となり、戦後、引き続き宮内庁の所管するところとなったのです。なお、宝庫は現在、古来の正倉のほかに西宝庫・東宝庫があり、いま宝物はこの両宝庫に分納して保存されています。

▲北倉29　螺鈿紫檀五絃琵琶

▲ 正倉院正倉

宝庫

正倉は前記のとおり、もとは東大寺の正倉で、奈良時代以来宝物を襲蔵してきた宝庫です。檜造り、単層、寄棟本瓦葺きで、高床式に造られています。間口約33メートル、奥行約9・4メートル、床下約2・7メートル、総高約14メートルの大きさをもち、床下には直径約60センチの丸柱が自然石の礎石の上にどっしりと立ち並んで、巨大な本屋を支えています。その豪壮な構えと端正な姿は、まことに奈良時代第一の大寺である東大寺の正倉、わけても国家的宝物を安置する宝庫にふさわしいものです。

倉は三倉に仕切られ、北（正面向かって右）から順に北倉、中倉、南倉と呼ばれています。北倉と南倉は、大きな三角材（校木）を井桁に組み上げた校倉造りで、中倉は、北倉の南壁と南倉の北壁を利用して南北の壁とし、東西両面は厚い板をはめて壁とした板倉造りです。また各倉とも東側の中央に入口があり、内部は二階造りとなっています。北倉は主として光明皇后奉献の品を納めた倉で、その開扉には勅許（天皇の許可）を必要としたので勅封倉とよばれ、室町時代以後は天皇親署の御封が施されました。中倉・南倉はそれ以外の東大寺に関わる品々を納めた倉で、中倉は北倉に准じて勅封倉として扱われ、南倉は諸寺を監督する役の僧綱の封（後には東大寺別当の封）を施して管理されましたが、明治以後は南倉も勅封倉となりました。

正倉院宝物が現在もなお極めて良好な状態で、しかも多数のものがまとまって残されているのは、一つには勅封制度によってみだりに開封することがなく、手厚く保護されてきたことに負うところが大きいのです。また建築の上からみると、宝庫がやや小高い場所に、巨大な檜材を用いて建てられ、床下の高い高床式の構造であることが、宝物の湿損や虫害を防ぐのに効果があったものと思われます。その上、宝物はこの庫内で辛櫃に納めて伝来しましたが、このことは櫃内の湿度の高低差を緩和し、外光や汚染外気を遮断するなど、宝物の保存に大きな役割を果たしたのです。

ところでこの宝庫は、奈良時代の創建以来、幾多の危機に見舞われています。治承4年（1180）の平重衡の奈良焼き（南都焼討ち）や永禄10年（1567）の三好、松永合戦の兵火による大仏殿炎上、建長6年（1254）の北倉への落雷などがその主なものですが、幸運にも大事に至らず、ゆるぎない姿で今日に伝えられたのです。

しかし、その間には経年による朽損、雨漏りなども少なくはなく、建物の維持のため、大小いくつもの修理が行われています。たとえば、いま見る外観のうちで、床下の柱に巻いた鉄の帯や、本屋を支える根太の鼻にかぶせた銅板は、後世の修理時に加えられたものです。

なお、宝庫の建築年時については、そのことを直接記録した資料がないので明確ではありませんが、文献に見える記事から、おそくとも天平宝字3年（759）3月以前に出来上がっていたことは確実とされてきました。

また宝庫が校倉と板倉とを一棟にまとめた特異な構造であるため、はたして創建の当初から現在のような形であったのか、あるいは中倉は後に継ぎ足されたものではなかったかということが専門家のあいだで議論されてきましたが、近年では、使用されている建築材の科学的調査（年輪年代法）によって、宝物献納と相前後する時期に、最初から現在見るような姿で建築されたとみる説が有力となっています。

なお、この正倉は、平成9年（1997）に国宝（正倉周辺地域は史跡）に指定され、翌年には「古都奈良の文化財」の一部として世界遺産に登録されています。

▲ 正倉の内部

宝物

前記のような由来をもった正倉院宝物は、そのほとんどのものが奈良時代、8世紀の遺品であり、波濤をこえて大陸から舶載され、あるいは我が国で製作された美術工芸の諸品や文書その他です。

いま宝庫に伝えられている宝物の点数は、整理済みのものだけでも約九千点という膨大な量に上っており、またその種類も豊富です。試みに用途別に分類すると、書巻文書、文房具、調度品、楽器楽具、遊戯具、仏教関係品、年中行事用具、武器武具、飲食器、服飾品、工匠具、香薬類など生活の全般にわたっており、奈良時代の文化の全貌を眼のあたりにすることができます。製作技法について見ても、金工、木竹工、漆工、牙甲角、陶器、ガラス、染織など美術工芸のほとんどすべての分野におよび、平脱、木画、螺鈿、撥鏤、三彩、七宝といった高度の技法を用いたものが多く、使用材料の種類も豊富です。光明皇后奉献の趣旨と品目を記載した献物帳、樹下美人像で知られる鳥毛立女屏風、世界唯一の遺品でもある華麗な五絃琵琶、遙かなシルクロードの旅路を偲ばせるカットグラスの白瑠璃碗、黄金・珠玉で飾った犀角如意、現存最古の戸籍である大宝2年（702）の戸籍、狩猟文その他異国要素の文様をもった正倉院裂の数々、その他著名な宝物だけでも数え上げるときりがありません。

▲北倉２　赤漆文欄木御厨子

このような内容をもった正倉院宝物はまた、次のような重要な特質をそなえています。それはまず由緒伝来や製作年代、使用年代の明らかな宝物が少なからず含まれ、このため学術上寄与するところが多いことです。次に宝物が出土品ではなく、伝世品であるという点です。古代の遺品といえば、多くは地中から発掘されたものですが、正倉院宝物は出土品ではなく、木造の宝庫に納められて、千二百年余にわたって伝世してきたものです。従って保存状態も良好で、伝世品としての品格と美しさを保持していることは、誰もが感嘆するところです。さらにいまひとつの特質は、世界性です。正倉院の宝物は、国際色豊かな中国盛唐の文化を母胎とするもので、大陸から舶来した品々はもとより、国産のものもまた、その材料、技法、器形、意匠、文様などに、8世紀の主要文化圏、すなわち中国をはじめ、インド、イランからギリシャ、ローマ、そしてエジプトにもおよぶ各地の諸要素が包含されています。なかでも注目されるのは、西方的色彩の濃厚なことですが、西方の要素は盛唐の文物に取り入れられ、やがて我が国に伝来して、正倉院にとどまっているのです。

「正倉院はシルクロードの終着点である」という言葉は、この宝物のもつ世界性の一端を言いあらわしたものといえるでしょう。正倉院宝物は、単に奈良朝文化の精華を示すだけでなく、実に8世紀の世界文化を代表する貴重な古文化財なのです。

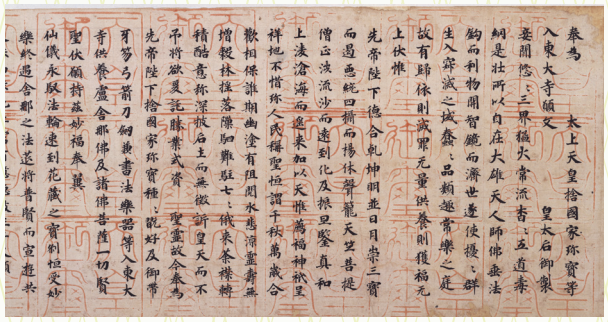
正倉院事務所では、宝庫・宝物の維持・管理にあたるとともに、宝物の研究調査、整理、修復、再現模造などを行い、調査報告を公刊して一般の参考に供しています。なお毎年秋、宝物の一部を奈良国立博物館で展観しています。

▲南倉１　伎楽面（酔胡王）

▲北倉４４　鳥毛立女屏風

▲北倉１　七条織成樹皮色袈裟

▲中倉７０　瑠璃坏



▲北倉１５８　国家珍宝帳

▲ 上空より正倉院の周辺を望む（奥側は東大寺大仏殿ほか）

正倉院の外構は月曜日から金曜日の午前１０時から午後３時まで一般公開しています。

ただし、土曜日、日曜日、国民の祝日、休日、年末年始（12 月 28 日から 1 月 4 日）及び正倉院事務所に行事のある日を除きます。

宮内庁正倉院事務所

〒 630-8211 奈良県奈良市雑司町 129
TEL: 0742-26-2811
URL: https://shosoin.kunaicho.go.jp/